

第三章 芸實教育の神髓を語る

早い教育の必要

話変わって茶の湯のお話。茶の湯の式なんかも、元元あれは一派の宗匠そうしやうとでもなれるような神に通ずるような方が、形のないものから形を拵こしらえたものであって、その型というものには、型にハマつて動かすこともどうすることもできないものではないのですが、だいたいその道筋としては神に通ずるにたぶん一番便利な自然の道でありましょうから、山登りの先達せんたがあの崖はこうして通る、あそここの谷はこうして渡るのだと、人を導くような心持で茶杓ちやしやくをこうして、袱紗ふくさはこんなようにして、と自分の見たところの便利で、風雅ふうがで、礼を失しないで、お客さんの気持を引き立てるような気持や型を教えたのが、心はとかく伝わりかねて、型だけが伝わったものと思います。ですから茶の湯その他の式なども先生が、神観を修める時に、その言葉など少々ちがつてもだいたいそんなような気持でとお教えくださるように、本当にその気持で型に拵こしらわれないで茶の式をやっているという力みが消えて茶を出されることが大事だと思います。でも一ひととおりがちなくとも師匠の通つた道を型どおり歩んで師匠はこんな道を一ひと番よいとして開いたのだということを知ること、大事な

ことと思ひます。これは絵で模写するようなものに当たるところでございませぬ。その上で同じ一派で同じ道連れで行くとしても、少々道の端を通るとも、草の上を通ろうとも、馳はせてみようとも、大股に歩むとも、自分の好き好きの心持に合あわせて行けばよいと思ひます。

無我で型を実行するのが精神統一の修養になる

わたしは、ああいう茶の湯の稽古けいこなにかただ一回しか見ないのでから批評のかぎりではないですけれども、局外者は、内部の人には見出せない拾い物の発見をすることがある。ああいうぐあいに、形から入ってゆく修行というものは、茶の湯などは閑人ひまじんばかりで、茶の湯そのものの遣り方を教えて家庭でやらそうというなら、あれは有閑婦人の製造ということになる。わたしの考えでは茶の湯は花嫁学校で教えるのは別の意義がある。あれは形から入ってゆく精神統一の修行である。つまり形に素直に随したがつて少しも我流を出さない修行をするということは一ひとつの無我になるということです。我があつたら順したがえないのです。

それでまず形式というものを教えてもらつて、その形式どおりなんでもかんでも、我というものをなしに一心に形式に順したがつてゆくと、そこに無我の修行というものができると思ひます。わたしは先日生まれて初めて茶の湯の稽古けいこというものを見た。その時、ああこれは神官しんかんの祭式さいしきと同じものだと直ち感かんした。神官は祭式をやつてると祭式をやっている自分の心

が浄まるばかりでなく、参列している人の心までも浄まる。そこまでゆけば、お手前拝見は神社参拝と同じような浄心的<sup>じようしんてき</sup>効果があつた。だけれども最初は形をいかにするかということを、はつきりと端的に教えてもらつて、芝居なら脚本を教へてもらつてそのとおりの無我になつて順つてゆくという時に初めて茶の湯の効果というものが現われるのじゃないかと思う。ところが一週間に一回くらいの教授では茶の湯の形というものが半歳くらいの間にはつきり呑み込めるかどうかかわらない。そんなことをやるくらいなら、結局茶の湯の教授はない方がましである。

生命の實相 谷口雅春 日本教分社